



Title	言語文化学 Vol.11 編集後記
Author(s)	由本, 陽子
Citation	大阪大学言語文化学. 2002, 11, p. 137-137
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77986
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

編集後記

本誌への投稿の締め切りは例年9月に設定されているので、本号は21世紀に入って初めての本学会の成果といえるであろう。それにしても、残念ながら、掲載論文数が7編、研究ノート1編と、近年の号に比べやや少な目であるが、それだけ査読者の目が厳しくなり、本誌の水準が高まったということではないかと考える。実際の投稿は、論文13編、研究ノート3編であったから、論文の採択率から見てもそのことは窺える。

学会員の研究成果発表に対する意欲は、実際年々高まっており、本学会のもう一つの発表の場である年2回の大会の方にも、昨年を上回る数の発表応募があった。6月の大会には、1日2会場ではとても消化しきれない15件もの応募があり、委員会で話し合いの結果現役院生の応募者については、指導教官の推薦を条件とすることで事実上選抜を行い、最終的には6月の大会で10件、10月大会で5件の研究発表がなされた。今回のように、大会に関してある種の選抜を行ったのは初めてのケースであったようだが、応募数が増加すれば、それだけより高い水準の内容が求められるようになるのは当然のことであり、本学会が良い方向に発展していることを反映するものであろう。大会での口頭発表のみならず、本誌への投稿の方も、応募数と内容の水準とが相俟って向上することが望ましい。

今回の執筆者には、現役の院生以外に修了生も3名含まれている。現役の院生には、博士論文に向けた研究の中間報告の場として積極的にこの場を利用してもらえばよいが、そのような目的以外で、是非修了生や教官の方々からも投稿いただき、本誌を内外から一流の学会誌として認識されるような水準にまで引き上げることが、現在我々の目標とすべきことではないかと思われる。

最後になったが、本誌の編集にあたっては、別記の査読に当たってくださいました先生方、また、助手の方々に大変お世話になった。とりわけ、事務局の仕事を一手に引き受けてくださっている大平さんにはこの場を借りて感謝申し上げたい。

2002年3月

編集委員会（由本陽子）